



しらさぎ

求めて学ぶ 考えて行う 自ら鍛える

目黒区立第八中学校
学校だより NO.12
(通巻195号)
令和元年(2019)
9月2日(月)

『小・中連携(交流会)』

校長 飯野 博史

夏休みが終わって一週間が経過しました。夏休み明けの授業を見て回りましたが、どの教室も落ち着いて学習に取り組んでいます。

今週末に前期期末考査を実施します。天候不順な日が続いています。体調管理にも留意しながら成果が発揮できるよう、ご家庭でも見守りをよろしくお願いいたします。

■小・中連携(交流会)

8月28日(水)大岡山小学校との小・中連携(交流会)を実施しました。大岡山小6年生と八中2年生が交流を深めました。

6年生に中学校について理解を深めてもらうことと、11月に実施する「いじめ問題を考えるめぐろ子ども会議」に向けてお互いに顔見知りになることがねらいです。

30グループに分かれ自己紹介をしたり、夏休みの出来事などについて話したりしました。6年生からは「勉強は難しいですか」「部活動は何時までやるのですか」「怖い先生はいますか」など、中学校に対する質問がたくさん出ました。

2年生が一つ一つ丁寧に答えていました。和やかな交流会となりました。

■生き方教室

8月29日(木)、2学年で「生き方教室」を実施しました。企業の方から職業についてのお話を伺い、職場体験に向けて望ましい勤労観・職業観を身に付けるのがねらいです。

今回は読売新聞東京本社、三井住友銀行、日本水産株式会社の方々から貴重なお話を伺いました。

授業の様子が「読売新聞」に掲載されました。



宣言

宣言

宣言

宣言



新聞の作り方役割紹介

目黒・第八中で出前授業

新聞@スクール

新聞記者らが新聞の読み方や新聞の魅力を伝える「出前授業」。目黒区立第八中学校では29日、読売新聞教育ネットワーク事務局の石橋大祐記者(43)が講師を務め、2年生55人を前に、新聞の作り方や役割などを

話した。写真。石橋記者は、新聞が読者の手元に届くまでに、取材して記事を書く記者や見出しをつける記者、配達員など多数の担い手が関わっていることを説明。「新聞では、直接会うことができない人のドラマも知ることができ、生き方を考える教科書になる」と締めくくった。

授業を聞いた西田香澄さんは「新聞はいつもパラパラと読むだけだったけど、これからは丁寧に読む」と話していた。

年度当初に実施した「目黒区学力調査」の結果を分析し、「授業改善プラン」を作成しました。全体の取組について掲載します。各教科の「授業改善プラン」は9月中旬までにホームページに掲載します。ご確認ください。

○ 昨年度の「授業改善プラン」の検証（成果と課題）

（1） 成果

今年度の結果を分析すると、2、3年生に関しては、基礎・基本、活用ともに全教科にわたり目標値を上回る、平均正答率であった。これは、「学習カード（振り返りシート）」の活用、ICTの活用、習熟度別少人数授業によるきめ細かな指導、授業規律の確立など、基礎的・基本的な力を育む環境が定着してきたことによるものと考えられる。また、グループ学習やペア学習を意識的に設定する、課題解決的な学習を設定するなどにより、活用する力も身に付いてきたものと思われる。さらに、「朝の読書」により、落ち着いた雰囲気の中で授業につながることも学習効果を高めている。

数学科と英語科における少人数授業では、習熟度別による指導を主とし、教科学習室の運用が効果的になされており、きめ細やかな指導も伴って、基礎的・基本的な力の定着につながっている。

（2） 課題

各教科とも、基礎的・基本的な学力については、ほぼ目標値を上回る数値であった。ただし、一部の教科において、思考力・判断力・表現力といった活用する力が目標値を下回っていないものの、やや弱い面がうかがえる。習得した知識を活用し、探究する力に課題があると言える。一方的に教師が教え込むのではなく、考える時間を確保したり、お互いに交流し合ったりする時間を確保するなど、言語活動を充実させ、思考力・判断力・表現力等をさらに育成する視点での授業改善が必要である。

また、生徒たちが「やってみたい」と思うような課題を設定し、ワクワクする「楽しく分かる授業」を展開することが課題である。それには単元導入時に、日常生活や社会生活との関連を図り、興味をもたせていく工夫が必要である。

「何を教えるか」という知識の質や量の改善とともに、生徒が「どのように学ぶか」という学びの質や深まりを重視するといった視点からの授業の質的転換を図っていくことが課題である。

さらに、各教科の意欲、理解力に個人差が見受けられる現状を踏まえ、生徒一人一人に対する個別の対応も課題である。学習意欲を高めるために、生徒一人一人に対して、家庭との連携、学習指導員・特別支援教育支援員も含めた全校体制での取組が必要である。

1年生については、どの教科も基礎・基本、活用ともにほぼ目標値を上回る平均正答率であった。引き続き、学級経営の充実、より良い人間関係の構築なども含め、多角的できめ細かな指導に努めていく。

○ 目黒区学力調査等に基づく「授業改善プラン」

本校の授業改善に向けた方策

- ① 本時の目標や学習の見通しを示し、生徒に身に付けたい力を明確にする。
- ② 授業の中に、意識的に思考をする時間を設ける。教師が一方的に授業を進めるのではなく、考える時間を必ず確保し、習得した知識・技能を活用した授業に取り組む。その際、個別指導、グループ別指導、習熟の程度に応じた指導、興味・関心に応じた課題学習など多様な指導ができるよう工夫する。また、定期考査においても、思考し、表現する問題を工夫し出題する。
- ③ 「楽しく分かる授業」を目指し、課題の発見と解決に向けて「主体的・対話的で深い学び」を取り入れた授業を工夫する。学習内容が日常生活や社会生活にどう関連するか明らかにする。
- ④ 各教科で「学習カード（振り返りシート）」を活用し、生徒の学習状況を把握する。「できた」「分かった」の実感を大切に、「できたこと」「分かったこと」の振り返りを確実に行う。
- ⑤ 数学科、英語科で少人数授業を行う。とくに数学科では習熟度別授業を行い、成果を全教員で共有し、それぞれの授業に生かす。
- ⑥ 校内研修などを通して、適正な評価・評定について研修を深める。個々の生徒の良い点や進歩の状況を積極的に評価し、指導の工夫・改善につなげ、学習意欲の向上に生かす。
- ⑦ 授業規律の確立や、朝の読書、校内の環境美化などに全校体制で取り組み、落ち着いた雰囲気の中で学習ができる環境づくりに努める。基本的な生活習慣や家庭での学習習慣の確立について、家庭にも協力を依頼する。

※ 全教育活動において思考力・判断力・表現力等を育成する観点から、実技教科においても授業改善プランを作成した。